

生きること

(原文は英語)

テシル・ブジメル・ジヌ (21 歳)

アラブ首長国連邦<インド在住>

多くの疑問は、時が経つにつれてその答えが見つかるものだ。しかし、問い直すたびに新たな側面を露わにし、永遠に答えの見つからない疑問もある。数年前、私はそのような疑問を自分自身に問うことを余儀なくされた。ある日、適当に選んだ動画をいくつか見ていると、そのうちの一本に自分でも理解しがたい感覚を覚えた。ある男性が自分の住む町のあちらこちらで物乞い人に話しかけるという内容だ。私は、その男性と一人の物乞い人とのやりとりに衝撃を受けた。男性が声をかけた物乞い人は、実際には若い男の人だった。男性がその若者に挨拶をすると、若者も笑顔で挨拶を返してきた。二人は地下道に座って話を始めた。若者はカメラで撮影されるのを気にしなかった。彼は児童養護施設で育ったことを打ち明け、大人になると地下道を住みかとするようになったと言う。通りすがりの人たちの中には食べ物を恵んでくれる人もいる。これが彼の生活だ。

しかし、自分でも理解しがたい力で胸が引き裂かれる思いがしたのは、彼の話の内容ではない。話しかけた男性がその場を去ろうとすると、若者はもう少し一緒に居てくれと男性に迫ったのだ。若者は悲しげに「寂しい」と言った。そして、もう少し一緒にいてもらおうと、男性に食べ物を差し出したのだ。男性はとても驚き、それをもらってしまったら、彼の食べ物が直ぐになくなってしまおうと言った。すると若者は、食べ物をくれる人はいつでもいるが、自分に話しかけるために足を止めてくれる人はいないと言った。若者はとても優しく礼儀正しいが、精神的に深く落ち込み孤独であることが私には見て取れた。しばらくすると、男性は若者に別れを告げ、別の場所の物乞い人と話をするためにその場を立ち去った。動画を見終わった私は放心状態だった。それから数分後、私はこらえきれなくなって泣き始めた、自分でも驚くほどに。思い返してみると、私の心を深く傷つけたのは、あの若者が孤独で落ち込んでいたことだけではない。大きく発展させたと私たちが誇らしげに主張する世界は今や、物乞いをする人でさえ食べ物を差し出して話し相手を探そうとする状況にあるということだ。物乞い人が自分の食べ物と引き換えに、ほんの少しの愛情と関心を示してもらおうとすることが、ショック以外の何ものでもなかった。私の心を突き刺したのは、この辛い現実だった。私はこうして「生きることは何か」を自分に問わざるを得なくなった。

生きることは、人間関係や家族・友人との大切な時間を犠牲にして、進歩し発展することをいうのか。

生きることは、自分の人生がいかにより有意義であるべきかを語り、自分自身と大切な人たちだけを

満足させるために夢を実現することをいうのか。

生きることとは、ただ難民キャンプに物資を供給し、それをメディアや新聞記事で自慢げに語ることをいうのか。

生きることとは、ただ自分を宣伝するために数品寄付して、支援を受ける人々と一緒に写真撮影し、その一方で彼らの自尊心を傷つけ、世間の目の前で彼らのイメージを損なうことをいうのか。

生きるとは、奉仕することだ。自分以外の人々が、単なる数字ではなく、かけがえのない生身の人間として真に生きていることを実感できるように奉仕することだ。「重荷になっている」「自分たちの世話が大きな負担になっている」と決して思わせることなく、彼らに奉仕することだ。依存心を抱かせ、精神的・感情的な縛りを与えるのは奉仕ではない。あなたが手を貸し持ち上げた人が、今度は他の誰かに対して、上から目線にならずに同じことができるように、そして、人間として生きることの本当の意義を実感できるようにするのが奉仕だ。助けになろうとすると同時に、その人の尊厳を守るように注意を払い、無私無欲に生きることこそ、私たちが手本とすべき生き方なのではないか。マザー・テレサがそうしたように。義務ではなく、名誉と思って奉仕することこそ、生きることなのだ。